



南葵音楽文庫ミニレクチャー

南葵文庫が育てたもうひとりのライブラリアン

橋井清五郎 (きつい せいごろう)

林 淑 姫

南葵音楽文庫

和歌山県立図書館内

和歌山市西高松 1-7-38

tel.073-436-9500

2019年8月17日(土) 11:00

南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)



橋井清五郎
(生年?-1947)

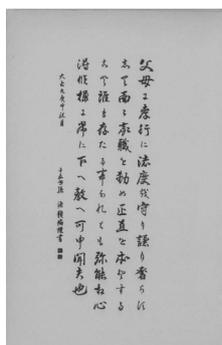


『南龍公御事略』

橋井清五郎、芝野六助編

(橋井清五郎、1920)

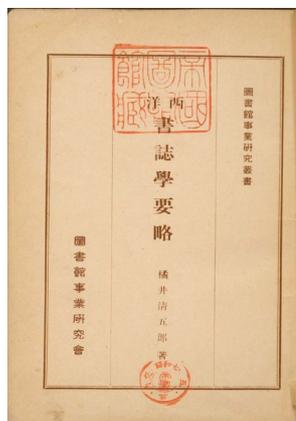
(和歌山県立図書館 A16.5/8)



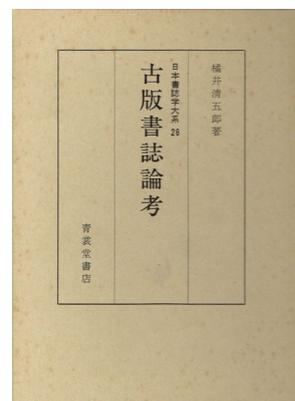
「父母状」
徳川頼倫筆
(同書・口絵)

南葵文庫はすぐれたライブラリアンを抱えていた。庫主徳川頼倫の「図書館の重要な要素は蔵書、利用者、そして図書館員である」という図書館経営者としての見識は、資料とひとを結ぶライブラリアンが果たす役割を重視させ、その養成に熱意を傾けさせた。主幹斎藤勇見彦の下での日々のトレーニングもあっただろうが、教育はそれに止まらず、1914(大正3)年、頼貞の英国留学の際には、掌書長橋井清五郎を欧米の図書館視察ならびに図書館学学習のために1年間派遣、また入職5年目の喜多村進を文部省図書館講習会で学ばせ、現在でいうところの「司書資格」を取得させている。文庫のすぐれた二人のライブラリアンはそのようにして育てられ、彼らの後人生を形成することになる。南葵文庫閉鎖後、東京帝大附属図書館勤務を経て南葵音楽図書館掌書長(主任司書)、のち和歌山県立図書館司書となった喜多村については既に語られこと少なくないが、もうひとりの橋井について触れられることは稀である。斎藤勇見彦の没後南葵文庫の主幹にも任ぜられた橋井清五郎はどのような人物であったのか、現段階では不明なことも多く、調査中ではあるがその一端なりと明らかにしておきたい。

頼倫は南葵文庫閉鎖後のライブラリアンたちの行く末にも心を砕いた。喜多村進には東京帝大から南葵音楽図書館につながる道を残したが、橋井清五郎は、当時『帝室和漢図書目録』の新版を準備中であった宮内省図書寮図書課に送り込んだ。橋井は宮内省勤務の傍ら和洋の書誌学研究に従事、國學院大學で教鞭をとる。日本図書館協会とは縁が深く、1913(大正2)以来斎藤勇見彦とともに評議員(理事)を務め、協会の運営に携わった。1941(昭和16)年に名誉会員に選ばれている。著書『西洋書誌学要略』のほか、書誌学関係論稿、図書館事情及び書物に関する広範な著述を残す。



著書『西洋書誌学要略』
図書館事業研究会、巧芸社
出版部、昭和7(1932).4
70 p. (国立国会図書館蔵)

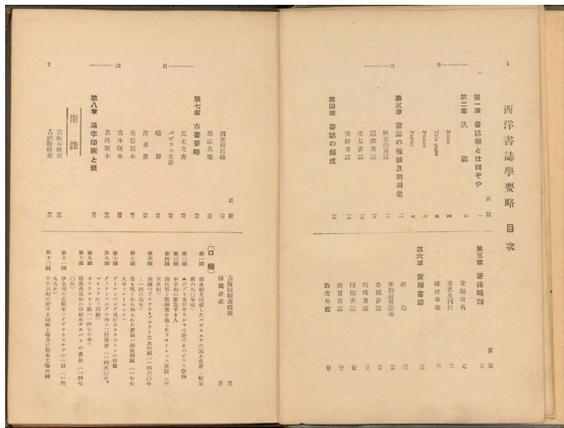


著作集『古版書誌論考』
青裳堂書店 昭和57(1982).8
218 p. (日本書誌学大系26)
(和歌山県立図書館 022/35/82)

《資料1》 徳川頼宣「父母状」(万治3(1660)年)

父母に孝行に 法度を守り
謙り(へりくだり) 奢らずして
面々家職を勤め 正直を本とする事
誰も存じたる事なれども
彌(いよ)能(よく)相心得候様に常に下へ教可申聞者也

《資料2》 『西洋書誌学要略』(1932)



【目次】

書誌学とは何ぞや	汎論	
書誌の種類及利用者	書誌の編成	
著録略測	実用書誌	古書要略
活字印刷と紙		
附録 古版本略表	古活版本略表	
古版印刷者略表	挿図者表	

* 初出: 『図書館学講座』第1巻～第3巻 図書館事業研究会編、刊 1928(昭和3)～31

《資料3》 『古版書誌論考』(1982)

【目次】

大伴赤麿懺悔文に対する異見	平安朝の模写法華経	紀州家旧蔵銅活字に就て		
古刻之一異例 韓板郷葉救急方	栄原氏収蔵関版	本草正統系図	顕忠祠碑及関係文書	
羽子板本の話	鉄道文学の恩人	書籍保存上の湿気問題	清明文庫の書庫	婦人書斎の通観
徳川頼倫侯を語る	太田為三郎君を憶ふ	同人安田氏を悼む	噫 鈴木重孝氏	
西洋書誌学要略(上記参照)				